スペイン語における l, n の口蓋化

Palatalización de *l* y *n* en español

北 村 一 親
Kazuchika KITAMURA

本稿は1990年5月19—20日に京都産業大学で開催された日本ロマンス語学会第27回大会における「スペイン語における口蓋化——イベロ・ロマンス諸語との関連において——」と題した筆者の口頭発表（5月20日）の概要をまとめたものである。概要に止めたのは紙幅が限られているためであるが，発表当日に会場で配布した筆者の発表資料全体にわたる詳細な論考は別の機会に譲る。

本稿の考察対象としてスペイン語諸方言が中心となるが，最終的にはこれにガリシア・ポルトガル語を加えたイベロ・ロマンス諸語に言及する。(1)

1. 口蓋化の定義

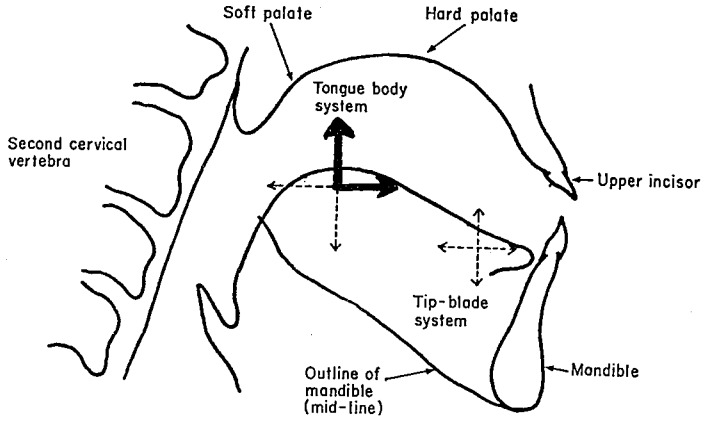
口蓋化（厳密には硬口蓋化）を類型論的に研究したものに Bhat (1978) がある。これは120のいろいろな言語における口蓋化の現象を検討し，その過程や条件を次のように考えた。(2)

口蓋化の過程	口蓋化の条件
tongue-fronting	palatalizing environment（環境）
tongue-raising	palatal～palatalized（変化結果）
spirantization	

すなわち口蓋化の3つの異なった過程は，単独またはいろいろな組み合わせで生じ，口蓋化の条件として変化の生じる環境は口蓋音が必要であり，変化結果として硬口蓋音か口蓋化音であるという。しかし本稿において後に述べるように，口蓋化の条件として調音の強調（特に舌尖調音の子音において）という現象も考慮に入れなければならないと筆者は考える。

生理学的に見た口蓋（化）音調音に際する舌の運動についても後述するが，ここではごく簡単に触れておく。図および舌筋運動の術語は Hardcastle (1976) による。

この図において tongue body system の左右方向が horizontal forward-backward movement で，上下方向が vertical upward-downward movement であり，筆者によって太線で示された右向き矢印が Bhat の tongue-fronting にあたる forward tongue body movement で，同じく太線の上向き矢印が Bhat の tongue-raising にあたる upward tongue body movement である。



Hardcastle (1976 : 101)

2. l, n の口蓋化と調音の強化

まず最初に音声変化における音の強化（また必然的に弱化も）とは何か，すなわち音の強さ・弱さとは何を基準に決められるものなのかを考えてみたい。従来，これらの問題を説明する際に「調音エネルギー」という術語が好んで用いられてきた。では一体，「調音エネルギー」とはどのような性格を有するのか，それはどの部位においてどのように計測しうるのかという説明はほとんどなされなかった。しかし何人かの学者は強い音・弱い音，すなわち fortis/lenis（または tense/lax）の音声学的記述を試みた。例えば N. S. Trubetzkoy は Spannungskorrelation（緊張の相関）とか Intensitäts-korrelation（または Druck-korrelation）（強さの相関）という術語を使い，口腔筋の緊張や長さ，そして口腔内気圧などに注意を向けた。[3] ただ P. Delattre はフランス語のすべての子音の強さをその子音に先行する母音の持続時間でのみ分析して一覧表にしたが，[4] このように単純なただひとつの判定法を用い，閉鎖音・摩擦音・流音・鼻音等を同じ尺度で計測するという Delattre の方法に筆者は疑問を懐かざるをえない。とは言え P. Ladefoged のように fortis/lenis は生理学的な意味を持たないとか，[5] K. L. Pike のようにこれらは都合のよい虚構である[6] という考えにも反対である。生理・音響・知覚のあらゆる音声学的側面から考察されてはじめて fortis/lenis の実体が明らかにされるのである。E. Fischer-Jørgensen は次のように生理音声学的な 4 つの観点と音響音声学的な 9 つの観点から閉鎖子音の実験を行なった。

Physiological measurements
- Position of the glottis
- Airflow
- Intra-oral air pressure
- Lip pressure

Acoustic measurements
- Voicing
- Fundamental frequency of the following vowel

Intensity of the explosion

Intensity rise of the following vowel

Duration of the closure period

Duration of the preceding vowel

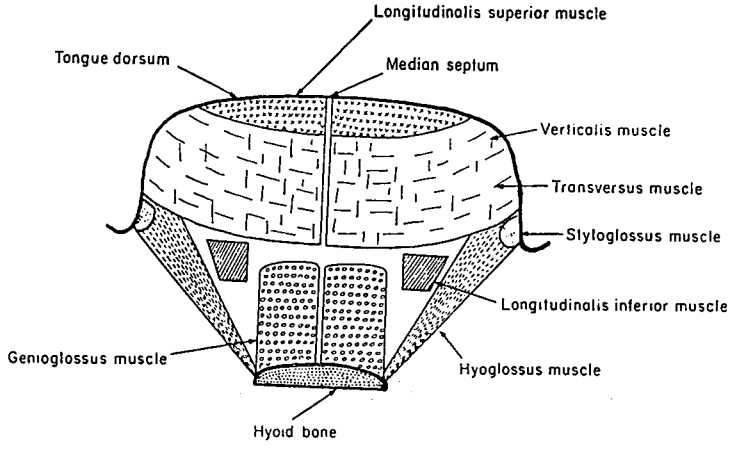
Duration of the following vowel

Duration of the open interval

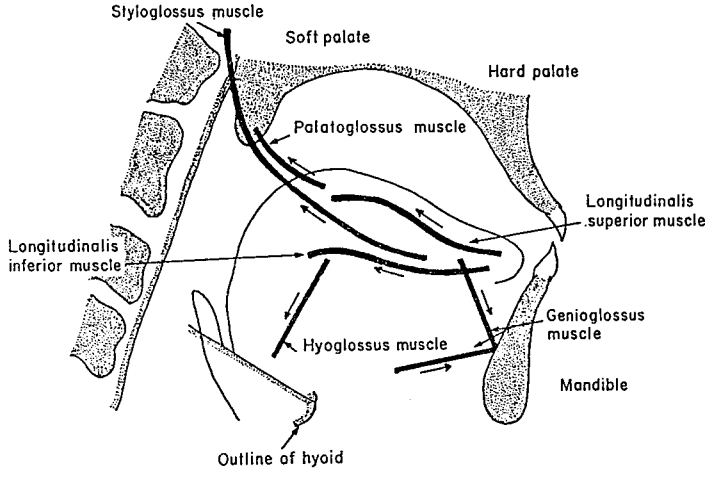
Transitions of the first formant

このような実験の積み重ねこそ我々に有益な結果をもたらすと確信するのである。

ここで本稿の主題である l と n について口蓋音性の有無と fortis/lenis の関係を見てゆくことにする。まず第1番めとして持続時間であるが，口蓋音性を有する子音の方が有しない子音よりも長く，A. Quilis によるとスペイン語の [l] の平均持続時間は 6.03cs であるのに対し，[ʎ] の平均持続時間は 7.32cs と長くなっている。[8] 一般に持続時間の長い音は短かい音よりも強いと考えられる。第2番めとして口蓋化調音形成の際の狭窄の増加による呼気の調音器官に対する抵抗の増大であり，G. Straka などもエネルギーを伴なう発声として母音における開口度の広まり，そして子音における狭窄の狭まりをあげているように[9] 子音の調音点における狭窄の程度が大きいほど強いと考えてよい。第3番めとして発声に関与する筋肉の運動であるが，口蓋音性を有しない [l] や [n] の調音では舌先の筋肉である上縦舌筋 (longitudinalis superior muscle) のわずかな上方運動であるのに対し，[l] や [n] の口蓋化した調音では頤舌筋 (genioglossus muscle) の後部の前方運動と茎突舌筋 (styloglossus muscle) および口蓋舌筋 (palatoglossus muscle) の上方運動という大がかりな筋肉運動が関与している。筋肉運動のより大きな音の方が強いと言える。



Hardcastle (1976 : 94)



Hardcastle (1976 : 94)

第4番めとしては通時的な観点からである。口蓋音性を有する [ʎ] や [ɲ] の方が口蓋音性を有しない [l] や [n] よりも変化を被りやすく，不安定であり，[ʎ] の場合ではフランス語，スペイン語，ハンガリー語など多くの言語で [j] となっており，[ɲ] も後述のようにフランス語やスペイン語で [nj] あるいは単に [n] になる場合がある。これらの事実は口蓋音性を有する音はより調音努力を必要とする音である事を物語っている。調音努力をより必要とする音はやはり強い音である。

以上の結果，口蓋音性を有した l や n は口蓋音性を有しない l や n に比べると筋肉の緊張をより必要とする強い音，すなわち fortis であるといえる。

3. イベロ・ロマンス諸語における l, n の口蓋化と強化

スペイン語を中心としたイベロ・ロマンス諸語の l, n に関する主な研究として時代順に Martinet (1952), Menéndez Pidal (1954), Catalán (1954), Allen (1964), Blaylock (1968), 伊藤 (1973a), (1973b), 原 (1974-75) 等がある。

Catalán (1954) はイベリア半島の諸言語・諸方言におけるラテン語 L-, -LL-, N-, -NN- に由来する音を調査したものであり，貴重な資料が駆使されている。本稿は Catalán (1954) を参照しながらも確認のため D. Catalán が使用した原典資料にあたり，さらにいくつかの新しい資料も追加した。この原典資料は本稿末の参考文献一覧の前に示した。なおスペイン語レオン方言中の A 方言・B 方言とは筆者が仮に分類した名称でラテン語 L-, -LL- を [ʎ] に変化させた方を A 方言，[tʃ] あるいはそれに類似した [c], [tʃ] 等に変化させた方を B 方言とした。レオン B 方言における L-, -LL->[tʃ] はアラゴン方言の一部における変化と軌を一にし，変化過程は次のように推定することができる。

L-, -LL->[ʎ]>*[j]>*[ʒ]>*[dʒ] → [tʂ]>[t]（アラゴン方言）
L-, -LL->[ʎ]>*[j]>*[ʒ]>*[dʒ] → [tʃ]（レオン B 方言）

硬口蓋音 [ʎ] からヨッドに変化する現象は硬口蓋音特有の sibilant offglide によるものである。

レオン B 方言の Bordinga, La Almuña, Pola de Somiedo, Busmente では L-, -LL- が変化して反転音になっている。この反転音の存在によって筆者の口蓋化による強化という結論をより確実にするのである。すなわち反転音の発生についてはこの場合，強調による舌と口蓋との接触面の増加が考えられるからである。[l] の舌尖を上顎につけたままで舌背を上方移動させた音が本稿で問題にしている口蓋化の原初的な調音であり，一方，[l] の舌尖を上顎につけたまま舌根を後方移動させた音が反転音であり，ともに強調による調音の強化であると筆者は考える。口蓋化においては非口蓋化音から聴覚的な弁別をするため（音声を明るくするため）後に舌尖を下げるのである。

イベロ・ロマンス諸語におけるラテン語 L-, -LL- および N-, -NN- に起源をもつ口蓋化による強化された音とラテン語 -L-, -N- に起源をもつ口蓋化されなかった（すなわち強化されなかった）音を調べた結果，イベロ・ロマンス祖語として前者の系列に属する fortis な音 */λ/, */ν/ と後者の系列に属する lenis な音 */l/, */n/ の対立を筆者は仮定した。古く文証される音もあわせるとイベロ・ロマンス祖語からイベロ・ロマンス諸語へのこれらの音の変化過程は次のようになる。

ガリシア・ポルトガル語

語頭	語中
{*/λ/>[ʎ]>[l] ——	{*/λ/>[ʎ]>[l] */l/>ϕ
{*/ν/>*[ɲ]>[n] ——	{*/ν/>[ɲ]>[n] */n/>ϕ

スペイン語カスティーリャ方言

語頭	語中
{*/λ/>[ʎ]>[l] ——	{*/λ/>[ʎ] */l/>[l]
{*/ν/>[ɲ]>[n] ——	{*/ν/>[ɲ] */n/>[n]

スペイン語アラゴン方言

語頭	語中
{*/λ/>[ʎ]>[tʂ](>[t]) ——	{*/λ/>[ʎ]>[tʂ](>[t]) */l/>[l]
{*/ν/>*[ɲ]>[n] ——	{*/ν/>[ɲ]>[n] */n/>[n]

スペイン語レオン A 方言

語頭	語中
{*/λ/>[ʎ] ——	{*/λ/>[ʎ] */l/>[l]
{*/ν/>[ɲ] ——	{*/ν/>[ɲ] */n/>[n]

スペイン語レオン B 方言

語頭	語中
{*/λ/>[ʎ]>[tʃ] ——	{*/λ/>[ʎ]>[tʃ] */l/>[l]
{*/ν/>[ɲ]>[n] ——	{*/ν/>[ɲ]>[n] */n/>[n]

上の表に基づいて説明すると，すべてのイベロ・ロマンス諸語で fortis */λ/, */ν/ が口蓋化した。スペイン語レオン A 方言はこの段階で止まった。ガリシア・ポルトガル語とスペイン語カスティーリャ方言では語頭に口蓋化の対立がないため（他の言語でも語頭にこの対立はないが，それが主因となって変化が生じたわけではない）より調音努力を必要とする [ʎ], [ɲ] が非口蓋化した。スペイン語カスティーリャ方言はこの段階で止まった。一方，ガリシア・ポルトガル語では語中の [l], [n] が消失したため語中でも口蓋化の対立がなくなり，[ʎ], [ɲ] が非口蓋化した。スペイン語アラゴン方言とレオン B 方言では [ʎ] が前述のように破擦音化したため，そしてこの変化が語頭，語中を問わず生じたため口蓋化の対立は解消した。すると次に示す相関が崩壊して [ɲ] も非口蓋化した。

この流音と鼻音に関する口蓋化の相関の崩壊に筆者が最初に気付いたのはフランス人インフォーマントからフランス語の調査をした時であった。[10] インフォーマントのフランス語は正書法 gn で表わされる音をつねに [nj]（本来は [ɲ]）で発音していたのである。後に文献を調べてみると古くは Passy (1914 : 75) にフランス語の [ɲ]>[nj] の記述が見られることや，[11] またスペイン語諸方言でもこの非口蓋化が生じていることが判った。[12]

このように見てくると，fortis */λ/, */ν/ はつねに強化を受けていることがわかる。ガリシア・ポルトガル語でも lenis */l/, */n/ が弱化して消失したため fortis */λ/, */ν/ は相対的に強化されている。

4. イベロ・ロマンス祖語における fortis/lenis の対立

これから述べることは未だ推測の域を出ないが，イベロ・ロマンス祖語の子音体系における fortis/lenis の対立は上記の子音のみならず他の子音にも認められるであろうと筆者は考えている。網羅的ではないが次にその対立を示す。

	fortis	lenis	
（相対的に強化）	*/π/	*/p/	有声化（弱化）
	*/τ/	*/t/	
	*/κ/	*/k/	
	*/σ/	*/s/	
口蓋化（強化）	*/λ/	*/l/	
	*/ν/	*/n/	（相対的に弱化）
	*/ρ/	*/r/	

一般的に考えて声の相関が成り立ちうる閉鎖音や摩擦音では lenis の方が有声化され，fortis の方は相対的に強化される。一般的に考えて声の相関が成り立たない流音や鼻音では fortis の方が口蓋化されて強められ，lenis の方が相対的に弱化される。イベロ・ロマンス祖語の */ρ/ は強化されて r の口蓋化音になったと考えているが，この音は例えばアルゼンチンにおける rr の摩擦音化したような音(13) であったろうと想定している。

イベロ・ロマンス祖語からイベロ・ロマンス諸語に分岐する際に fortis な音は強化され，lenis な音は弱化するという体系的改変を受けたと筆者は考えている。

注

(1) カタロニア語はロマンス諸語におけるその言語学的位置付が問題とされるため今回の考察からは除外した。（この問題に関しては Meyer-Lübke (1925), Griera (1925), A. Alonso (1967), Kuen (1973), Bec (1978) 等を参照されたい。）ただし今回の l, n の口蓋化を考える上でカタロニア語は非常に興味深い資料を与えてくれるという事実は否めず，今後の課題となるであろう。

(2) Bhat (1978: 49–50)

(3) Trubetzkoy (1958: 139)

(4) Delattre (1966: 114)

(5) Ladefoged (1964: 38–39)

(6) Pike (1951: 128)

(7) Fischer-Jørgensen (1969)

(8) Quilis (1981: 276 & 281)

(9) Straka (1963), (1964)

(10) 1986年9月11日調査。インフォーマントは Lorence d'Andigné 女史。Paris 出身，女性，1960年生まれ，学生，両親も Paris 出身。

(11) 他に Michaelis & Passy (1924: 321), Malmberg (1969: 106–07) も参照。

(12) Toledo における ñ の非口蓋化に関しては Moreno Fernández (1988), Bucarest での非口蓋化については Sala (1971: 149 & 151) 参照。

(13) Malmberg (1950: 141) 参照。

〈資料〉

Acevedo y Huelves, B y M. Fernández y Fernández (1932) *Vocabulario del bable de occidente.* Madrid.

Alonso Garrote, S. (1947) *El dialecto vulgar leonés hablado en Maragatería y tierra de Astorga.* Madrid.

Alvar, M. (1948) *El habla del Campo de Jaca.* Salamanca.

Alvarez, G. (1949) *El habla de Babia y Laciana.* Madrid.

Badía Margarit, A. (1948) *Contribución al vocabulario aragonés moderno.* Zaragoza.

——— (1950) *El habla de valle de Bielsa.* Barcelona.

Canellada, M. J. (1944) *El bable de Cabranes.* Madrid.

Casado Lobato, M. C. (1948) *El habla de la Cabrera Alta.* Madrid.

[Caveda, J. (ed.)] (1839) *Colección de poesías en dialecto asturiano.* Oviedo.

Cobas, M. G. (1964) *El habla de Luarca,* I. Luarca.

Elcock, W.-D. (1938) *De quelques affinités phonétiques entre l'aragonais et le béarnais.* Paris.

Galmés de Fuentes, A. y D. Catalán Mz. Pidal (eds.) (1957) *Trabajos sobre el dominio románico leonés,* I. Madrid.

García Valdés, C. C. (1979) *El habla de Santianes de Pravia.* Mieres del Camino.

González Guzmán, P. (1953) *El habla viva del valle de Aragüés.* Zaragoza.
Krüger, F. (1923) *El dialecto de San Ciprián de Sanabria.* Madrid.
Kuhn, A. (1935) 《Der hocharagonesische Dialekt》, *RLiR*, XI, 1–312.
Menéndez García, M. (1950) 《Cruce de dialectos en el habla de Sisterna (Asturias)》, *RDTP*, VI, 355–402.
Menéndez Pidal, R. (1962) *El dialecto leanés.* Oviedo, reimpresión.
Munthe, Åke W: son (1988) *Anotaciones sobre el habla popular de una zona del occidente de Asturias.* (trad. por M. Berta Pallares) Uviéu.
Navarro Tomás, T. (1920) 《Datos antiguos sobre pronunciación asturiana》, *RFE*, VII, 382–83.
Neira Martínez, J. (1955) *El habla de Lena.* Oviedo.
Rato y Hévia, A. de (1985) *Vocabulario de las palabras y frases bables.* Gijón, reimpresión.
Rodríguez-Castellano, L. (1953) 《El sonido ŝ del dialecto asturiano》, en *Estudios dedicados a Menéndez Pidal*, IV. Madrid, págs. 201–38.
——— (1954) *Aspectos del bable occidental.* Oviedo.
Rohlfs, G. (1985) *Diccionario dialectal del Pirineo aragonés.* Zaragoza.
Vigón, B. (1955) *Vocabulario dialectológico del concejo de Colunga.* Madrid, nueva ed.

〈参考文献〉

Alarcos Llorach, E. (1986) *Fonología española.* Madrid, cuarta ed., séptima reimpresión.
Allen, Jr., J. H. D. (1964) 《Tense/Lax in Castilian Spanish》, *Word*, XX, 321–295.
Alonso, A. (1967) 《La subagrupación románica del catalán》, en *Estudios lingüísticos: Temas españoles.* Madrid, tercera ed., págs. 11–83.
Alonso, D. (1972) 《Temas y problemas de la fragmentación fonética peninsular》, en *Obras completas*, I. Madrid, págs. 13–290.
Bec, P. (1978) *La Langue occitane.* [Paris], cuarta ed.
Bhat, D. N. S. (1978) 《A General Study of Palatalization》, en Greenberg (ed.) *Universals of Human Language*, II. Stanford, Calf., págs. 47–92.
Blaylock, C. (1968) 《Latin L-, -LL- in the Hispanic Dialects》, *RomPh*, XXI, 4, págs. 392–409.
Catalán, D. (1954) 《Resultados ápico-palatales y dorso-palatales de -LL-, -NN- y de LL- (<L-) NN- (<N-)》, *RFE*, XXXVIII, 1–44.
Delattre, P. (1966) 《La Force d'articulation consonantique en français》, en *Studies in French and Comparative Phonetics.* The Hague, págs. 111–19.
Fischer-Jørgensen, E. (1969) 《Voicing, Tenseness and Aspiration in Stop Consonants》, *ARIPUC*, III, 63–114.
Granda Gutiérrez, G. de (1966) *La estructura silábica y su influencia en la evolución fonética del dominio ibero-románico.* Madrid.
Griera, A. (1925) 《Castellà-Català-Provençal》, *ZRPh*, XL, 198–254.
原　誠 (1974–75)「スペイン語通時音韻論の諸問題」『ロマンス語研究』8・9, 5–23頁。
Hardcastle, W. J. (1976) *Physiology of Speech Production.* London.
伊藤太吾 (1973a)「イスパニア語のラムブダキスムス」『大阪外國語大學學報』29, 35–44頁。
——— (1973b)「口蓋子音の生成についての考察」*Estudios hispánicos*, 3, 74–97頁。
Kuen, H. (1973) 《Die Stellung des Katalanischen in der romanischen Sprachfamilie》 en *Festschrift für H. Flasche.* Bern, págs. 331–52.
Ladefoged, P. (1964) *A Phonetic Study of West African Languages.* Cambridge.

Malmberg, B. (1950) *Études sur la phonétique de l'espagnol parlé en Argentine.* Lund.
——— (1969) *Phonétique française.* Malmö.
Martinet, A. (1952) 《Celtic Lenition and Western Romance Consonants》, *Language,* XXVIII, 192–217.
Menéndez Pidal, R. (1954) 《A propósito de *ll* y *l* latinas》, *BRAE,* XXXIV, 165–216.
——— (1980) *Orígenes del español.* Madrid, novena ed.
Meyer-Lübke, W. (1925) *Das Katalanische.* Heidelberg.
Michaelis, H. y P. Passy (1924) *Dictionnaire phonétique de la langue française.* Hannover.
Moreno Fernández, F. (1988) 《Despalatalización de ñ en español》, *LEA,* X, 61–72.
森於菟他 (1984)『解剖学, 1, 骨学・靱帯学, 筋学』東京, 改訂11版3刷。
Passy, P. (1914) *The Sounds of the French Language.* Oxford.
Pike, K. L. (1951) *Phonetics.* Ann Arbor, fourth printing.
Quilis, A. (1981) *Fonética acústica de la lengua española.* Madrid.
Sala, M. (1971) *Phonétique et phonologie du judéo-espagnol de Bucarest.* The Hague.
Straka, G. (1963) 《La Division des sons du langage en voyelles et consonnes peut-elle être justifiée ? 》, *TraLiLi,* I, 17–99.
——— (1964) 《L'Évolution phonétique du latin au français sous l'effet de l'énergie et de la faiblesse articulatoires》, *TraLiLi,* II, 1, págs. 17–98.
Trubetzkoy, N. S. (1958) *Grundzüge der Phonologie.* Göttingen, zweite Auflage.